

## 同席大名間における「申合帳」の変遷過程 — 詰衆を例として —

五十嵐一郎

### はじめに

近世大名制のもとで、平日も数人ずつ交代で江戸城雁之間に詰める詰日の勤めをはじめとし、各種儀礼への関与も見せていた詰衆は、幕末を迎えるまでその半役職的性格を帯びながら勤めを果たしていた。弘化・嘉永期の詰衆の実態については、すでに松尾氏によって明らかにされており（１）、それによるとこれまで筆者が見てきた寛政期の勤務と大きな違いはなく（２）、詰日の勤めに関してはこの期間もほぼ同様であったといえる。詰衆は近世後期には同席間における勤務の取り決めに定めたいわゆる「申合帳」を備えていた（３）。筆者にて確認できた申合帳は、宝暦期から万延期のものまであり、それらは当時の情勢に応じて加筆・修正が加えられた。まずは安政期に見られる改訂過程の一端を紹介しつつ、確認できる各時期の申合帳を比較することで、時代に対応しようとした詰衆の姿を明らかにすることにより江戸後期を通じての詰衆の実態を明らかにすることを目的とする。

（安政七年）正月六日

——以回章——、然者同席申合帳之義、追々取調も仕候処、銘々扣少々宛相違も有之候、且箇條前後の処も相

見候付、不分明之儀も御座候付、此度取調箇條増減致し、申合帳壹丹相回申候、御一覽之上思召も無御座候ハ、御銘々様早々御順達——以上

十一月晦日 松平織部正

板倉内膳正

土井能登守

略之

猶以能登守在邑中之者御座候共、出立前申談も致置候事故、名前差加申候、——以上（４）

本史料は当時詰衆であつた牧野豊前守（誠成）の日記であり、日付は正月六日のものであるが、十一月晦日の廻状の写が残されている。この廻状の差出はここからでは当勤之衆であつたことしか断定できず、十一月晦日当日に詰日之衆であつたとも推定される（５）。ここでは申合帳の存在が明らかになつており、その申合帳は詰衆各自で保持していたことがわかる。

そしてその各々が持つてゐる控（申合帳）に少しずつ異なる部分が生じているという。これは詰衆同士で定めたものが、年月を経て加筆・修正を加えられていったためと考えられる。さらに文面に相違があるだけでなく、書か

れている条項の順番も前後していることがあるとされ、当然そのようなものであれば、互いに何か確認したいこと、もしくは申合帳に依拠した行動をとる際などに不具合が生じることとなる。そのため今回それらを調査し、条項の順番や条文数を整えることを触れ回ったものと捉えられる。こうした調整の取り組みがどのくらいの頻度で行われていたかは不明であるが、詰衆としての勤めを果たすために行っていたものであろう。このときは誰が所持していた申合帳であるか読み取ることはできないものの、ひとまずは詰衆内にて回覧の上、それらを写し取ることを求めている（なお、一月晦日に差し出されたものが年明けになって牧野のもとに届いている点については参勤交代などの理由があったものと考えられる。後述）。この後も日記は以下のように続く。

（安政七年正月六日）

一 右正月四日秋元但馬守より到来

一 板倉内膳正殿勤掛より廻状ニ而此度之申合帳改ニ付内膳正より先達而相回被申候然ル処取急通達の儀ニも候間、何卒五・七日程ニ而写取ニも相成、順達候様致度与被存候段申来（6）

当初前年の一月晦日に差し出された廻状が、ひと月ほど経過して牧野のもとに通達された。その背景には書き写す作業（行程）に日数を要したようにも伺える。というのも先に見た史料において宛名こそ明記されていないが、傍線によって省略された数がそのまま宛名人の数と等しかったとするならば、牧野をも含めて六名いたことになる。また差出人である板倉内膳正からは、五・七日程で写し取って次の者へ順達するように希望していることから、牧野のもとに届いたのがひと月ほど日数がかかっているにもかかわらず納得できる。

## 一 近世後期の詰衆の勤務

さつそく申告帳を比較検討していきたいが、拙著にて宝暦期・寛政期の詰衆については幾分かその勤務内容を明らかにできており（7）、松尾氏による研究で天保・文政・弘化・嘉永期の勤務においてもそれほど大きな違いはないということはすでに述べたとおりである（8）。申告帳を広く見るためにこうした長い期間において勤務の仕方に変化がないことを確認しておく必要はあろう。以下では天保・文政期における詰衆の行動について特徴的に見られる事項について簡単に述べておきたい。

### 【史料一】

（天保六年）十月三日

- 一 急助心得日之処、風邪同様ニ付返心得三甚太郎江相頼（9）

### 【史料二】

（天保八年）七月十八日

- 一 詰日之処少々風邪ニ付播磨守江相頼、自分急助相心得候

（中略）

七月廿九日

- 一 急助日之処、青播磨守江返心得相頼、同人詰日江為返詰登 城（10）

まず、急助心得の差替は、寛政期では同組の相詰に依頼するものとなっていたが、このときには詰日之者と急助

心得日を交換しているのである。さらにはその返心得に關しても詰日に設定しており、詰日―急助心得日の差替をそのまま返詰―返心得として両者間で執り行っている。

また初めて詰日を勤める者に対して「心添之者」がともに勤める様子が伺える。

(天保十年) 七月八日

一 板伊予守方江永井一郎左衛門差出左之義問合候

一 同席家督被 仰付候後初而詰日ニ出候節、万端心添之者詰日ニ無之節者前以割元江頼遣候而宜哉  
左之通答有之

一 右様之節者万端心添之者家督之者申合、心添之者与割入之義申遣候事

右ニ付今昼後永井山城守今度家督自分万端心添ニ付一郎左衛門ヲ以申遣候

(中略)

七月十日

一 永井山城守家督被 仰付候ニ付被致登 城、右之扣自分被相頼候

七月十三日

一 詰日ニ付登 城、相詰永山城守初而詰日ニ付横麻縮着用被致登 城候事

(後略)

(天保七年) 四月廿一日

一 田沼備前守今日雁之間被 仰付、万端心添本豊前守心添永飛驒守、自分被相頼候事

四月廿四日

一 詰日二付登 城、相詰青播磨守之處、為差替本豊前守、田沼備前守、初而詰日被勤候、退出九時前（11）天保七年の記録からは田沼備前守が雁之間詰を命じられたことに伴い、万端心添を本多豊前守が、心添を永井飛驒守と牧野が担うことになったとされる。それから三日後に田沼が「初而詰日」を勤めたこととされており、心添の牧野が相詰となっている（差替として本多豊前守も勤めてはいるが、これが万端心添によるものか、単純に青山播磨守との差替でたまたま居合わせるようになったかの判断はできない）。また天保一〇年の例を見ると、永井山城守が七月一〇日に家督を継ぎ、三日後の一三日に「初而詰日」を勤めるにあたって心添の者が相詰となるように取り計らっている様子が伺える。

以上がこれまで明らかにした宝暦・寛政期における詰衆には見られなかった姿である。

## 二 宝暦期頃の申合帳

本節以降は、時代を追う形で申合帳を取り上げ、とくにこれまで拙著で扱ってきた詰日の勤めを中心とした条項に焦点をあてて分析を試みたい。まずは「雁之間被仰合覚付 附商売往来」と表題のついた史料である（以下「覚付」と略）（12）。成立は明記されていないものの、条文を拾っていくと、享保期から延享期までの事例をあげて条文を形成していることから、おそらくは宝暦期以前である可能性が高い。冒頭は詰日の初出となる元禄一四年六月二三日に発せられた、時の老中小笠原佐渡守からの書付の写を収めている。条文数は一二〇を越えるが整理されているとは言い難い。というのも後述となるが、後世の申合帳は「詰日・助・急助」「両山」というようにある程度部門別にまとめられているのに対し、この「覚付」に関してはそうした配列ではなく、ある程度類似する内容で固

められて記述されている感はあるが、目的の箇所素早くたどり着くにはやや実用性に欠けている。

また、後の申合帳の項目にならって条文を分類してみると、その割合としては着服に関する記述が多く、後の「心得」という部門に該当する部分になる。異論も出ることと思われるが、実際に後世の申合帳のどの項目に配すべきか迷うものも多々存在する。

詰日に関する条項を抜き出してみると「一 家督以後初詰日罷出候節、為届御用番江ハ不参候、当時届入申候」、「詰日之儀自今三人以上可罷出候、忒人者罷出間敷之旨、享保七寅年大目付衆被申聞候、当時ハ二人迄ハ出ル」、「詰日前々者三人宛致出仕候所、同席人少二付、兩人宛致出仕候、然とも不快多、忒人ニ相成候義度々有之候二付、元文二巳四月十四日被 仰出候趣左之通（後略）」、「詰日差替ニ而登 城之節、致退出候而早速本詰頼先之方江手紙ニ而 殿中相替儀無之有之義申遣候事」（13）、以上の条文が見られる。これらを見ると、詰日を勤める人数について変化があったことがわかる。享保七年には三人以上で勤務することを定めたが、元文二年には「同席人少」の状態から「兩人宛」の出仕となったとされる。享保期は詰衆の員数が江戸時代を通して最大となることからこうした取り決めがなされたと思われる（14）、以降は減少したことなどに加え、「不快多」くなれば、「忒人」詰となる状況も増えていったと考えられる。詰日以外には、助詰に関する条文も五箇条程度見つけることができ、たとえば「一 御門番相勤候者当番中 御成有之其日詰日ニ相当り候者助を申遣也（後略）」（15）とその後も続く公的な理由による詰日の欠勤の補填手段としての助詰という位置づけはこの時代から続いていたことがわかる。

この「覚付」とほぼ同じ内容を収めながら、これに加筆されたものも確認できた。『水野家文書』内の「申合（元禄〜宝暦期）」（16）（以下「申合（水野Ⅰ）」と略）には二〇条が加えられ、全体としては「覚付」と同じ内容

のものと合わせ一五〇条近くになる。その加筆分について宝暦六年の事例をあげていることから、宝暦期以降に成立したものと見て良いであろう。ただしここでも「覚付」と同様に項目ごとに分類されておらず、むしろ新たに定めた条文は末尾へ追加していく形であったと思われる。

加筆されている条文を見ていくと一条目から四条目までは廻状の出し方に関するもの、五条目は御機嫌伺、六条目に惣出仕時の着服規定、七条目御成、八条目詰日（菅人詰）、九条目に廻状の規定があり、十条目が「雷之事」、一一、一二条目中御礼、一三条目饗応、一四条目が儀礼における詰日の扱いとなっている。ここで注目したいのは追加分の一四条目である。少し引用してみることにした。

一 宝暦六丙子七月廿七日、此度御誕生之 姫君様 御七夜為御祝儀（中略）同席申合五半時頃登 城、（中略）酒井讃岐守殿詰日之義如何可有之哉与被申候故、大目付神尾備州江土屋能登守殿土屋能登守殿被承合候処、入可申旨被申候故、酒井讃岐守殿・拙者 御本丸江致登 城、大目付松下肥州江又候承合候之処、肥州被申候者、御老中方若年寄衆方西丸江登 城被致候、上様二茂西丸江被為成候事二候間、詰日入申間敷与存候、殊二今朝菅人茂不相見段御老中方江茂申遣置候間、西丸江早々登 城可仕旨被申候故、西丸江登 城致候（後略）（17）

宝暦六年七月、後の將軍家治と正室との間に生まれた長女千代姫（のちの華光院）の御七夜のお祝いが行われることになった。このとき家治はまだ將軍職に就いていないため西丸に居り、千代姫の祝儀関係も西丸で予定されていた。そこで詰衆はこの日の詰日についてどうすべきかを大目付の神尾備州へ問い合わせたところ、「入可申旨被申」たので、酒井讃岐守らは本丸へ登城し、詰日の勤めを果たそうとした。しかしその場にて大目付の松下肥州にも尋ねてみると「御老中方・若年寄衆方西丸江登 城被致候、上様二茂西丸江被為成候事二候間、詰日入申間敷」と告



げられ、老中と若年寄が西丸へ登城していること、將軍も西丸へ行っていることを理由に詰日を勤める必要はない、と伝えているのである。さらにはこの日の朝の時点で「詰日老人茂不相見」状況を老中に報告済みであるから、すぐに西丸へ登城するように指示している。ここでは本丸での詰日を勤めなくてよい理由が二つ挙げられており、老中・若年寄の不在と將軍の不在となっている。一つ目の老中・若年寄の不在を理由とすることについては、おそらく詰日の勤めのうちの一つの要素となる老中廻りが老中不在のため行われないことが考えられる。また將軍不在の点については松尾氏が指摘するようにあくまでも詰衆は將軍の近くで勤務するものとされていることから、將軍の行く先々に向かうことが役割としてあったことを裏付けるものである(18)。

あくまでも指摘するだけに留めたいが、当時の詰衆の日記からも上記の老中・若年寄の不在を詰日不要の理由として大目付が伝達していることが伺える。先の土屋能登守の日記には大目付の松下肥州と大井勢州からの回答として「今日詰日之者罷出候事二而者無之、年寄衆之方其心得二而御座鋪廻り者無之趣二御座候」(19)とし、將軍の有無について語られている部分としては「只今御本丸御留守二而年寄衆二も西丸江皆出仕」(20)と述べている部分がある。

その他一五条目に先の御七夜祝儀に関するものが続き、一六条目に予参勤方、一七条目に紅葉山参詣に伴うもの、一八条目は後の両山にかかわる内容で、一九条目、二〇条目は阿蘭陀人御札関連のものとなる。

### 三 「古 同席申合帳」と宝暦期申合帳の比較

次に見ていくのは「古 同席申合帳」(以下「古」と略)である(21)。ここでは表紙にこそ「天保九戌年三月

表1 「古 同席申合帳」における「雁之間被仰付覚付」、「申合〔元禄～宝暦期〕」からの継続掲載条文数

部門 (( ) 内数値は「古 同席申合帳」の条文数)	「雁之間被仰付覚付」	「申合〔元禄～宝暦期〕」
一 詰日申合 (18)	9	9
二 助先 (8)	4 (3)	4 (3)
三 廻状申合 (16)	6 (1)	9 (1)
四・五 病気差合并痘瘡麻疾水痘病人之節遠慮之事 (17)	6 (5)	6 (5)
六 (紅葉山) 予参申合 (14)	5 (3)	5 (3)
七 両山供奉予参 (13)	0 (2)	2 (3)
八 伺御機嫌 (35)	12 (2)	16 (2)
九 御門番・火之番相勤候節申合 (18)	10 (2)	10 (2)
十 徳川熊五郎殿元服之例 (1)	1	1
十一 供廻り之儀ニ付被 仰出 (1)	1	1
十二 出火之節申合 (20)	2 (1)	2 (2)
十三 地震 (2)	1	1
十四 雷 (1)	0	0 (1)
十五 御座席奉行 (6)	3	3
十六 雑之部 (7)	0	0

( ) 内は一部改訂して掲載している条文の数

「古 同席申合帳」(『牧野家幕府役職詰席等関係資料』江戸東京博物館蔵)、「雁之間被仰付覚付」(東北大学狩野文庫蔵 紀伊国屋マイクロフィルム版)、「申合〔元禄～宝暦期〕」(『水野家文書』首都大学東京図書館蔵)により作成

松平図書頭借写「牧野山城守」とあるが、内容を見ると先の「覚付」(及び「申合(水野I)」)からの転載が多く見られることと、天明八年一月以降に始まる急助に関する条項が含まれていないことから、おそらくは「覚付」成立以後、かつ明和年間以前に成立したものと思われる。ただし、後の時代に見られるような部門別に条文が配列された構成になっており、これよりすぐ後の成立と思われる申合帳でも部門別に整理されていないことから、そうした点については疑問が残る。後になって見出しがつけられたものであろうか。

また、「古」の後の時代になって追筆されたと思われる箇所において「詰日より御目見二兩人罷出候、天明七未年六月相極ル」(22)との記述が見られることから、本文自体は天明七年以前に成立していた可能性が高い。

「古」に収められている条文中、「覚付」と同じ条文は七五条、「申合(水野I)」とは八六条が確認できた。およそ全体の半数近く、もしくはそれ以上が踏襲された形になっていた。内訳を見てみると表1のようになる(なお、

ここでは便宜的に「古」における部門別に分けて考える。

ではさっそく「覚付」（以下本節ではとくに断らない限り「申合（水野Ⅰ）」も含んで考察することとする。）との比較をしていきたい。「覚付」の前書部分にあたる詰日起源を示している一文は「古」における「詰日申合」部九条目の「先例」とされた箇所に記録されている。「覚付」同様にそれ単独では条目とならず、「古」においてはほかの条文の中に組み込まれて、「先例」として引き合いに出されている。その「先例」を含む「古」九条目は「覚付」における六四条目と同文である。

概算で「覚付」が一四〇条余、「申合（水野Ⅰ）」が一六〇条余に対し、「古」は一六六条となる。先に見たように「覚付」に二〇条ほど加筆されたのが「申合（水野Ⅰ）」であるから、「古」についてはそれほど加筆されたことがない印象も見受けられる。

それでは各条文を確認していきたい。まず詰日に関する条項であるが、「古」に残る一八条のうち、半数の九条が「覚付」からのものをそのまま継承している。「古」に新たに加えられている条文について見ると差替関係のものがいくつか目立つ。例えば「詰日差替、出仕無之候得者、其段廻状ニ銘々申遣候」（23）と、詰日の差替をして出仕しなかった場合について、ここではその差し替えた旨を各人へ廻状にして伝えることが定められている。これには傍筆があり「当時廻状不差出」とあることから天保期には適用されなかったものと思われる。さらには寛政期の日記にもこのような対応をした例は見られないことから（24）、「古」は寛政期以前の取り決めだったと推定される。

続いては「詰日差替ニ而不致出仕候節、相詰之方江手紙ニ而明日拙者詰日之处、差替或者返詰誰殿被致出仕候与申義申遣候事」（25）という条文である。詰日を差替る場合、相詰へ手紙でその旨を伝え、代わりに誰が「差

替」もしくは「返詰」として出仕するかを伝えることを定める。同様のものとして「一 詰日不快二而出仕不申候時ハ、相組江断申遣候、御人不足候へハ助順江申遣候、順之衆不快二候得ハ、其先方々又次之順江段々申遣候」(26)なるものがある。ここでは差替に関する記述ではなく、不快で詰日を勤めることができれば、相詰へ断をし、その上で人数が不足となれば助詰を求めることとされている。さらに助先もまた不快であれば順繰りに助詰を求めることとされる。差替→助詰ではなく、差替…私的理由、助詰…不快という分け方であったと考えられる。これに関連する条文としては「一 詰日兩人迄ハ助不入、忝人之時者助順江申遣候事」(27)なるものがあり、三人詰以上の時に欠員が出る場合で、二名以上が詰日として勤めるならば公的補填手段での助詰の必要がないことを示し、忝人詰となる場合に助詰を求めることを定めている。なお、この条文とほぼ同じ内容のものが次の「助先之事」の一条目にあるので合わせて見ておきたい。「一 惣而詰日兩人迄ハ助詰入不申候、万一忝人二罷成候得者、助詰入申候、万一助之衆間ニ合兼申候へ者、大目付衆江断申遣候」(28)。条文の前半は直前に見た「詰日申合」の条文と同内容と見て取れる。ここで新たに出てくるのは後半部分で助詰による補充が間に合わず忝人詰となつてしまった場合には大目付へその旨を伝えることを定めている。

この条文があることと「古」全体を通して急助に関する一文が存在しないことから、本申合帳は天明八年以前に使われていたものと考えるのが妥当といえよう。このことを支えるものとして「助先之事」部には「覚付」に記載されている助詰に関係する条文がそのままの形で構成されていた。また「古」においておそらく書き写された当時の判断によるものと思われるが「当時不用」との傍筆があり、その条文として「一 御成有之節、御門番・火之番并屋敷前通御二付在宿之衆 御成之義被致承知候儀、早速助先江為心得其定趣可申遣候事」(29)とある。「覚付」においても「早速助先江為心得其旨可申遣置候事」(30)という部分において若干の差異は認められるものの、

条文の主旨は同じものと捉えられる。このほかの条文も大きな差異は認められず、およそ「覚付」から「古」間において助詰に関しては条文を改訂するだけの事態は起こらずに運用されていたと考えられる。

一方で「古」における後世の追筆と思われる箇所には、二六条目に「一 介相勤候ハ、詰日之衆江留守居ハ銘々留守居江格手紙を以爲知可申遣候事」に対して「助詰勤候後者、当時助拂直廻状差出候事」とある(31)。これはつまり「覚付」及び「古」成立期と考えられる元禄・明和期では助詰を勤めた後は留守居が詰日之衆の留守居同士で「格手紙」によって助先が次順へ移ったことを周知させていたのであるが、「古」を借写した天保期ではこれが「助拂廻状」という廻状形式による周知方法へ変化していることを伺わせる(寛政期にもすでに「助拂廻状」との名称はないものの廻状形式で助順が流れたことを周知させている)。ただし、但書で「詰側ニ寄直廻状ニ而爲知申遣候事」(32)とあり、「直廻状」と「格手紙」併用による周知方法から「助拂廻状」形式一本に統一したというほうが適当とする見方も可能である。

廻状に関する条文が出たので、以下では「覚付」と「古」間における通達事について触れておく。「古」では「廻状申合」という部門が設けられており、そこに含まれる条文は一六箇条が認められる。そのうち「覚付」中の文言とほぼ一致するものは六箇条、「申合(水野工)」とはこれに三箇条分増えて九箇条の一致が認められる。まずはこの条文をそのまま引き継いで掲載しているものを紹介したい。ここでは主として「覚付」の文言を示し(33)、異なる細かな点については「古」からも引用する。

一 惣而輕義ニ而茂被 仰出候御書付之類ハ直廻状差出、年寄衆ハ自分江付ル義ハ留守居より以奉札可申遣事

(二〇六条目)

一 在邑之衆中江触候事ハ其御書付之旨趣により候間、於殿中当日相詰之衆迄遂相談、留守居より爲知可申遣

候事（一一五条目）

一 差急候触事在邑・幼年之衆江申遣候砌後、從留守居銘々留守居江格手紙を以為知可申遣候事

但 不差急之儀ハ廻狀ニ而留守居より為知可申遣候事（一一六条目）

一 詰日之節大目付中口達ニ而來ル幾日老中方之内誰殿対客有之候与申儀承候へハ、退出後早速留守居より用

（ママ）廻狀ニ而差出候之事（一二二条目）

一 大目付中より被達候儀、惣而被 仰出候之義ハ直廻狀ニ而申遣候、尤向寄分いたし出候幼年之衆・長病之

衆江ハ留守居へ申遣候、勿論在邑之衆江も留守居より申遣ス（一二四条目）

一 御目付達之儀又ハ大目付ニ而も被 仰出ニ而無之事ハ從留守居廻狀差出候事

但 年寄衆病氣ニ而見廻斷之類也、附リ詰側により直廻狀ニ而申遣候事

以上が「覚付」と「古」間で同一とみられる条文である。

次にやや改変が見られる条文を示し考察を加えていきたい。

一 連名ニ而廻狀出シ候節、詰日被致候衆中江斗廻狀差出、幼年之衆江ハ留守居より向方留守居迄為知申遣、

前髪有之候而も月次登 城被致候衆者格手紙ニ而可申遣候、且又病氣たりとも在勤之衆江者格手紙ニ而申

遣、御暇後之衆江ハ從留守居為知可申遣候事（34）

上記において「古」では「尤、詰日・助断ニ而月次斗出仕被致候衆江格手紙にて可申遣候」（35）という内容が

書き加えられている。また「覚付」にて「一 惣而大目付中口達ハ少々之事ニ而も廻狀ニ而相達」（36）と短い条

文があるが、「古」ではこれに近いものとして「一 詰日之節大目付衆へ書付被相渡候節、又ハ口上にて被申聞候

儀ハ、同席中江以廻狀申遣候事、但 御礼有之御沙汰承候者、廻狀ヲ以可申遣候事」（37）というものが認められ

る。これに関連して「古」から新しく追加されたと認められるものとしては「一 惣而大目付被申聞候事、書付被渡候事、惣而其日之事ハ詰日ニ而取扱申候事、廻状ハ不残出申候、御成ニ而承知之事ニ而茂書付有之事ハ廻状ニいたし候、口達一通りニ而何茂聞済候事ハ申合次第ニ而廻状不申候、夫も在所之衆江も不申遣候事ハ早々ニ有之候」(38)とあり、さらに「一 詰日之節大目付中ハ被渡候御書付、或者口達之儀同席在府方江廻状差出候節、相詰方江廻状之写、手紙ニ而差遣候、尤如此廻状差出候と申儀申遣候事」(39)という条文も確認でき、大目付からの書付や口達への扱いについて事細かに決まりを設けていた姿が見て取れる。

そのほかでは「日光御門主御饗応を詰日ハ廻状ニ而相達」(40)とある条文も「古」になると「日光御門跡・増上寺方丈御饗応之義ハ詰日より廻状」(41)と一部が加筆されている。儀礼関連の通達事でいえば「覚付」で「二三節句時服献上之義近年者大目付ハ達有之候得者廻状差出、達無之候ハ、不及廻状」(42)と記される一方で、「古」ではこの条文は見当たらない。

#### 四 明和・天明・寛政期の申合帳

本節では「古」以降の申合帳を扱うが、この間には短い期間で手直しされる事象が見られる。

まず最初に見るのは明和九年の申合帳である(43)。前書を見ると「勤方諸事は迄申合有之中、心得区々ニ而一向無之趣茂有之難決候付、此節参勤御礼相済候共御暇未被仰出、同席中大勢有合候ニ付、向後区々ニ無之様猶又宝暦十一年辛巳年七月申合相極候、左之通」とある。先にも明らかにしてきたが、詰衆は参勤交代のタイミングによって四つのグループに分けられて勤めを果たしており、最も多くの詰衆が在府するのは、一つのグループの参勤

が行われ、かつどの詰衆に対しても御暇がまだ出ていないわずかな期間しかなく、その絶好の機会を利用して同席中で合議したものと思われる。

このあと比較検討するこの時期の申合帳も「覚付」と「申合（水野一）」の関係に近い状態で残されているものがあり、いくつか連続して存在する。ひとつは「申合書付」（44）なる表題が付されているもの、二つ目は先に前書を引用した「明和九年壬辰九月十五日 従秋元撰津守到来申合之覚」（以下「明和九覚」と略）と表紙に書かれたもの（45）、三つ目が「天明八申六月 雁之間詰申合控」（以下「天明八控」と略）（46）、そして「雁之間被仰合留」（以下「留」と略）（47）、さらには「寛政元酉年 雁之間詰申合覚 八月」（以下「寛政元覚」と略）である（48）。

以下では「申合書付」と「明和九覚」を先に扱う。両史料ともほぼ同じ内容で、条文数は「申合書付」が二七箇条、「明和九覚」は二九箇条となっている。直前に見た「古」よりも条文数が極端に少なくなっているのには、儀礼における着服規定などが特化して、申合帳とは別に「年中行事」等と表した帳面に移行していった可能性を指摘しておきたい。ただし、それらの帳面の成立時期が不明であるため、この点については今後の課題としたい。条文数だけを見ると「明和九覚」のほうが後の成立とも考えられるが、「申合書付」に加筆された条文には安永四年のものがあり、それが「明和九覚」には見られないこと、また条文のひとつに但書が追加されていることから、こちらの方が後になってきたものと仮定したい。二箇条分少ない点については、ひとつには条文がそのまま削除されているものがあること、もうひとつには明和九覚では二箇条に分けて記載しているものが「申合書付」では一つの条文としてまとめられているためである。これらの点については後述することとして、両史料の成立経緯について少し見ていきたい。元々は先に見た「宝暦十一年」というのが一つの指標となるが、「明和九覚」二九条目、「申合



書付」二六条目には次の記述が見られる。「(前略) 右書面之趣者宝曆十一年巳年申合候上相極候儀ニ候得共、尚又ケ条之内当時申合候趣有之付、認直候而致廻達候、御承知被置候様存候 明和三丙戌年」(49)。前書にあった宝曆十一年からは六年ほど経過したところで改訂の必要が生じる条文があったということなのであろう。そして続けて表題のひとつともなる明和九年時点での改訂理由が示される。「近頃申合区々ニ相成、右戌年申合之書付之内ニ有之事共を間違候儀有之候儀有之候付、此度申合之上猶又洩候儀書加朱星付相廻申候間、以後者相知兼候者、右書付御覽被成、其上相知兼候儀者古キ衆江御尋可被成候以上、明和九壬辰年」(50)。先に見た明和三年からさらに六年が経過し、互いの理解に相違があり、洩れもあったので加筆されていることもあるという。このとき書き加えられたと思われるのは一箇条、全体の約三分の一が改められたものといえる。その上で今回改めた申合帳を以てしてもわからない事態となれば「古キ衆江御尋可被成」としている。つまりは古参の詰衆に聞くべしというまとめ方である。

その後「天明八控」及び「留」が作成される。以下、「留」について述べると、本申合は表紙に天明八年と記載がある。中身を見ると、当初は同年六月に申合帳を改めたとあり(おそらくはこれが「天明八控」にあたる)、「留」はそこから約半年が経過した同年十一月のものである。

「留」は全五八条からなり、天明八年に急助詰が始まったことによる改訂と見られ、この申合帳においても部門別に行っていることはないが、ある程度の条文のかたまりとしてまとめて項目を揃えている感がある。その成立の背景については以下の記述が見られる。「同席申合帳面安永六丁酉六月相定候得者、参勤交代ニ而隔年二申合茂区々ニ相成候付、当春中伺之上御差図等ニ而追々申談之筋茂有之、入組難見分ニ付、六月中相糺帳面相極候、然処其後同相済候儀其外申合事共有之ニ付、猶又此度申談、右之通ニ相極候也」(51)とあり、安永六年に「留」の基本と

なる申合帳が定められたと見られる。しかし詰衆内の参勤交代の在府期間のずれから徐々にその内容も区々になつたため、それから一〇年経つた天明八年六月に改訂した。さらには半年を過ぎた十一月の改正理由を前書部分に示している。そこには「以廻状致啓上候、然者当六月中同席申合帳面相改申候、然処其後何等相済其外申合候事共茂有之候間、猶又此度申談相極候帳面壹丹相廻申候、御順達留リ之從御方御返却可被下候、以上 十一月十九日 酒井修理大夫」(52)とあり、安永六年の後に天明八年六月、さらに同年十一月と改正されたことが明記される。このようにして再び内容を改める必要からこのたびの帳面になつたと見ることができよう。なおこの「留」の末尾には寛政元年の事例が書き加えられているため、順次こうして追記されながら各人の持つ申合帳が区々の状態になつていったとも考えられる。

以上のことから「明和九寛」↓「申合書付」(安永四年追加) ↓安永六年 ↓「天明八控」(天明八年六月) ↓「留」(同年十一月)とたびたび改正が行われていたことがわかる。

以下では「申合書付」・「明和九寛」と「天明八控」・「留」とを比較していきたい。先に見たとおり、「申合書付」と「明和九寛」、「天明八控」と「留」は各々ほぼ同じ内容であるため、「申合書付」と「留」をベースとする。「留」は急助詰条項が入ってくるため、明らかにそれまでと詰日・助詰の勤めの部分でこれ以前と比較して条文数が増えてくるのであるが、そのほかの部門でも「申合書付」を継承している条文もみられ、その数は一六箇条余となる。

一 御番所相勤候節非番二候共上野・増上寺江参詣之節豫参行列不罷出、為御目見致出仕候、且又紅葉山御参詣二而豫参行列罷出候、御成之節者詰日茂相勤候事

但三御番所・外櫻田御番所之外者、非番二候得者豫参・行列罷出候事 (53)

これは「申合書付」の一条目である。また但書部分は「申合書付」のみに見られるもので、「明和九寛」には記載

がない。これが「留」になるとやや長文となり、以下の通りとなる。

一 紅葉山、上野・増上寺江大紋行列二而御参詣之節、御人少二相成候義有之候間、已後紅葉山 御参詣之節者三大手御門番当番、大手・櫻田組火之番者格別、其外御門番者、当番・非番共豫参・行列罷出、三御番所相勤候共非番二者可罷出候、且上野・増上寺御参詣之節御門番当番者御門江相詰候得共、非番二候ハ、豫参・行列可罷出、三御番所・外櫻田御番所非番二候共豫参・行列不罷出、為 御目見致出仕候事

但 門前通御之節者致在宿、遠 御成二者門前通御二而茂詰日相勤候事 (54)

ちなみに後述するが、幕末まで用いられていたと見られる申合帳においてもこの条文を改編したものが一条目となっている。「留」の但書は「申合書付」七条目に通じるものがあり、「一 遠 御成之節門前通御二而茂詰日相当候者詰日相勤可申事」(55) とされ、この条文がそのまま但書に反映されている。

つづいては「申合書付」三条目と「留」三条目である。

一 火之番防相勤候節、上野・増上寺、紅葉山御参詣之時、行列・豫参不罷出、為 御目見致出仕、紅葉山御参詣之節者、豫参相勤、行列二者不罷出、為 御目見致出仕、遠 御成之節者、詰日茂相勤候事 (56)

一 防相勤候もの上野・増上寺 御参詣之節御目見二も不罷出、致在宿、紅葉山 御参詣之節者は迄之通豫参相勤、行列二者不罷出、并遠 御成之節詰日茂不相勤致在宿、且西丸遠 御成之節茂同様相心得致在宿候事

但兩人詰之節者助先江可申遣事 (57)

「申合書付」では火之番と防をと共に扱っており、また上野・増上寺、紅葉山のいずれに対してもが一定の対応をとることとされる。表2で示すとおり、両申合帳間において対応に差が生じている。唯一継承しているのは上野・増上寺参詣時における火之番当番時の対応である。紅葉山参詣でも御目見として出仕することになるものの、それ

より前に豫参を勤めることとされる。

さらには「申合書付」八条目と「留」一三条目を見てみよう。

一 御札無之十五日・廿八日或者不時御札衆等有之、何茂罷出候節ハ、火之番相勤候共致登 城候事（58）

一 御札無之十五日・廿八日或者不時御札衆等有之、何茂罷出候節者、火之番防相勤候共

致登 城候事（59）

ここではわずかに一字が異なるのみで「申合書付」が火之番のみの条文であるのに対し、「留」は火之番と防を対象範囲としている。本条に関してはほぼそのまま継承されているといえる。

次に「申合書付」一一条目及び「留」一五条目を比較したい。

一 御曲輪内出火之節為伺御機嫌致登 城候程合之儀区々ニ相成、耽与無之候付、向後者翌日為伺御機嫌可致登 城候、且又虎之御門内、鍛冶橋・数寄屋橋内、小川町辺、水道橋内、半蔵門御外、糺町辺出火之節翌日先致登 城伺御機嫌入申哉承合候上其思儀

二可応候事（60）

一 御曲輪内出火之節為伺御機嫌登 城之儀区々ニ相成耽与無之ニ付、向後者翌日出仕申合可相伺候、外御曲輪内出火之節者承合其思儀二可応候事（61）

この両条もまた内容としては同じものと認められよう。

ではここで詰日の勤めに關する条文を見ていきたい。まず「申合書付」一一条目、一二条目の二箇条を、次に「留」から二五条目・二八条目の同じく二箇条を引用する。

一 助詰之儀部屋住之者耆人、家督之者耆人右両人詰之節、不快等二而詰日難罷出候ハ、可

表2 「申合書付」と「留」での紅葉山・上野増上寺参詣時の対応比較

	上野増上寺		紅葉山	
	火之番	防	火之番	防
「申合書付」	御目見	御目見	御目見	御目見
「雁之間被仰合留」	御目見	在宿	豫参→御目見	在宿

「申合書付」（『牧野家幕府役職詰席等関係資料』江戸東京博物館蔵）、「雁之間被仰合留」（東北大学狩野文庫蔵、紀伊国屋書店マイクロフィルム版）により作成

相成丈ハ差替可申候、調不申候者助順江可申遣候事

一 家督之者・部屋住之者右兩人詰之節家督之者差掛り不快二而登 城無之節、助詰江申遣シ間ニ合不申節者  
大目付江申聞候事 (62)

一 不快等之節可成たけ差替可申候、三人詰ル者壹人不快等二而難致出仕節者頼合兩人二而詰日相濟候得共、  
相詰嫡子之衆斗二候ハ、差替或者助立家督之もの可致出仕候事

一 嫡子之衆与兩人詰之節当朝ニ至り病氣指合等二而不罷出節者、家督之助先江申遣、万一家督助順段々相障  
候節者、部屋住之助先江相戻助詰可申遣候、右之節者詰日部屋住之衆兩人ニ相成候、其節若大目付衆・御  
目付衆達有之候者、其日詰日ニ相当候家督之もの江部屋住之衆より被申越、家督之者より廻状差出候事

但格別急候儀者部屋住之衆より廻状被差出候様申談置候事 (63)

上記の四箇条から見て取れるのは、双方の申合帳で共通して部屋住之者（嫡子之衆）と家督之者とを区別して考  
えており、しかも部屋住之者は詰日の勤めを行うことはあつても、家督之者に準じる存在のように扱われていたこ  
とがわかる。というのも「申合書付」——一条目においては部屋住之者と家督之者とが相組となつたとき、そのどち  
らか一方が不快等で詰日を勤められなくなつた場合、差替、助詰の二段階を設け、一二条目では同条件下で家督之  
者が不快で急遽登城でなくなつた場合には助詰を依頼し、間に合わなければ大目付へ報告することを定める。こ  
れには後の急助詰を設定することになる条件となつていとも考えられる。「留」でも不快時における差替を優先  
させること、即ち助詰を安易には頼らないことを意味するものと捉えられ、二つの申合帳にわたつて認識されてい  
たことといえよう。「留」二五条目でも三人詰において一人が出仕できなくなり、かつ相詰が嫡子之衆であつた場

合は家督之者によつて差替か助詰によつて勤めることとされる。同じく「留」二八条目でも嫡子之衆が相詰となつ

ていて、自分が不快であつたなら助詰を求めることを定め〔申合書付〕一二条目と同様、しかもまずは家督之者の助先に依頼するものとされる。それがかなわなければ、部屋住之者へ依頼するが、大目付や御目付からの伝達事項があればその旨を欠勤中の家督之者の本詰へ伝えて、その本詰から廻状を差し出すものとしている。以上のことから両申合帳が通用されていた期間においては部屋住之者と家督之者は詰日の勤め自体に違いはないものの、部屋住之者だけでは詰日を勤めることがないように差替の優先と助詰依頼先の指定を定めていたものと思われる。これはあくまで部屋住之者は家督を継いでいる状況にない者であつたことが背景にある。部屋住之者だけで詰日を勤めることを嫌つていたのであろうか。その様子を伺える一文として以下の内容が見られる。

（前略）紅葉山 御参詣之節部屋住之衆豫参二罷出、家督之者老入茂豫参不罷出候、此以後又候、家督之者一人茂不罷出、年寄衆も沙汰有之候而如何 御座候付向後当日詰日二相当候面々少々不快二而茂押而罷出可□之段申談候（64）

ここでは、老中からの沙汰を受けるには家督之者があたることが相応しいとの立場をとつていとも考えられる。次に三人詰について触れている点をさらに拾つていきたい。「申合書付」一四条目、「留」二二条目からの引用となる。

一 三人詰よりハ老人不快等二而難罷出節者、相詰江頼合兩人二而詰日相済可申事

但 詰日二相当候節御用筋二而登 城之節者助相立可申候（65）

一 三人詰以上之節者御用二而詰日不罷出候共、詰日之者兩人有之候ハ、助不相立兩人二而相済可申候、

三人詰二而兩人御用二而詰日不罷出節者一人助立、詰日兩人二而相済可申候事（66）

「申合書付」においては「御用筋」における詰日の欠員については助を立てることを定めているのに対し、「留」では三人のうち一人が「御用」で欠員となる場合には助詰を必要とせず、三人のうち二人が「御用」のために欠員となったときに助を求めることとしている。ここからも「御用」に対する「助詰」という図式が見えてくるのであるが、一方で「留」においては兩人さえ出仕していればたとえ「御用」での欠員だったとしても助を立てる必要はないとしていたとも考えられる。両者の間に人数を揃えることを主とするのか、あるいは「御用」に対しての詰衆全体の対応を重視するかという側面が見えるのではないだろうか。これは詰衆、とりわけ当勤之衆の員数の変化も背景にあったかと思われ、当勤之衆だけの比較は難しいものの、詰衆総数の年代別の増減をみると「留」が出たころは最大の員数を誇った享保期よりも減少してきており、さらには寛政期の日記から勤務の「御人少」の状態が騒がれ、また補填機能としての急助詰が備わってきくことも関連付けて見ていく必要があろう。

次に見ていくのは後の申合帳において「通達事」部門に配される内容である。構造的に捉えると「申合書付」において複数の条文に分かれていたものが「留」で一つにまとめ上げられている特徴がある。その最たる条文は直廻状によって伝えるものである。「申合書付」中の一五、一七、一八、一九、二〇条目はどれも直廻状を用いて通達するものとされ、これが「留」になると一つの条文に集約される。一つ付け加えるならば、「留」では直廻状での伝達先に「当勤之衆」の文言が入れられ指定されている点である。「申合書付」の条文を細かく見ていくと、一五条目が大目付からの書付および口達の扱い、一七条目では廻状を差し出す機会に関して「不急儀」であれば「夜二入廻状差出二茂及間敷候間、翌日出差」(67) することとするものがある。なおこの一七条目には但書があり、「留」では独立して一つの条文を形成するに至る。二箇条続けて引用する。

但 不急儀廻状夜二入致到来候者留置、翌朝廻達之事、且翌日出仕事等其外二而茂急候儀者向寄々々兩人宛之

名当ニ致し廻状差出可申候、半之人数之節者屋敷向寄之方江書加、長病之者并詰日断之者江下廻状可申遣事 (68)

一 翌日出仕事等其外急候義者、屋敷向寄両三人宛之名宛ニ而直廻状差出可申候、夜二入候ハ、到来刻限加ヘ可申事 但長病・幼少之衆江者下廻状差出候事 (69)

一八条目は「高家衆・御奏者番衆申合登 城之儀」についてであり、一九条目には御用向や御番所火之番を命じられたとき(ただし、「留」では「防」の役目も加えられている)の通達方法を明記する。二〇条目は「病氣差合等」で「引込」んだ際も直廻状を用いるとされる。これら五箇条と後に見る一箇条が集約され以下の条文を構える(70)。「留」の条文に「申合書付」の該当条文の番号を付記してみる(傍線、丸囲みは条文番号であり筆者による)。

一 大目付衆御書付被相渡候節又者口達書<sup>⑮</sup>・御用向、其外御番所火之番<sup>⑰</sup>、防等被 仰付候節<sup>⑱</sup>、且高家衆・御奏者番衆申合登 城之儀<sup>⑲</sup>、病氣差合等ニ而引込候之節<sup>⑳</sup>、右当勤之衆江直廻状差出可申候、不急儀者夜二入廻状不及差出、翌日出出可申候、順達も夜二入候ハ、同様之事<sup>㉑</sup>

但 品ニより病氣之衆江茂直廻状之事<sup>㉒</sup>

但書部分は「申合書付」の二三条目の後段に近い一文があり、「(前略) 格別重キ儀者格状ニ而詰日之者連名ニ認申遣候、其節ハ病氣・幼少之面々茂直廻状」と規定する(71)。「申合書付」では「病氣・幼少」を一括で扱い、「留」では「一 格別重儀者幼少之衆江茂直廻状、在邑之衆江者詰日之者ヨリ格状差出候事」(72)と新たに一箇条を設けて、幼少之衆と在邑之衆への対応を定め、「申合書付」では明文化されていない「重儀」の「在邑之衆」への伝達方法として「格状」を明記している。さらにこれに関連して「留」三四条目において「一 直廻状差出候



節、在邑・病氣・幼少之衆江者下廻状差出、急候儀者下手紙之事」と定める(73)。これは「申合書付」二三条目の前段「一 病氣・幼少・在邑之面々江者何事ニ寄らす下廻状ニ而可申遣候(後略)」(74)という部分と内容がほぼ一致しており、「留」において新たに「急候儀」以下の急用を伝える場合の手段について「下手紙」を用いることが組み込まれている。

続いての条文は大目付を介しての老中からの通知の伝達方法を定めた一文である。両申合において対応に大きな違いはないが、「申合書付」の二箇条分を一文にし、「留」にはより具体的な例示がなされている。そのままここで引用してみたい。

一 大目付衆の年寄衆吹聴事等都而自分事ニ而被申聞候節下手紙ニ而可申達事

但 在邑・病氣・幼少之面々江者下廻状ニ而申遣事(75)

一 大目付衆の年寄衆病氣差合等ニ而登 城無之見舞等断候段被申聞候節、下手紙ニ而申遣候事

但 在邑・病氣・幼少之面々江者下廻状ニ而申遣(76)

一 大目付衆の年寄衆月番之外御用有之、誰殿心得被居候与申儀、且病氣差合等ニ而登 城無之月番誰殿被相勤

候旨、尤見廻等断之儀、宅普請、客对等断之儀、拝領物都而吹聴事等被申聞候之節、下手紙ニ而可申遣事

但 在邑・病氣・幼少之衆江者下廻状差出候得共、月番心得之儀斗者下手紙ニ而可申遣事(77)

以上のように「年寄衆吹聴事」に関しては下手紙とし、在邑・病氣・幼少へは下廻状としている点は両申合帳とも共通しているといえる。ただ「留」の但書において「月番心得」に限っては在邑・病氣・幼少へも下手紙を用いることを定めている点がここで新たに加えられている。

以上は大目付からの通達事への対応であったが、御目付からのそれについても両申合は定めており、「申合書付」

では「何二不寄下廻状」とし(78)、「留」でも「不依何下廻状」と変わりはないが、新たに「急候儀者下手紙之事」という一文が加えられている(79)。

これまでも見られたように「申合書付」から「留」への過程において通達事に関していえば、「急候儀」への対応が明文化されているということがあげられよう。もちろん「申合書付」においても「急候儀」の文言を見出すことはできるが、「留」ではより多岐にわたり伝達速度に氣遣っていた様子も伺える。本項の最後に通達事とは直接の関係は薄いが何度が出てきた「在邑」の扱いについて触れた条文を紹介したい。「申合書付」では「御暇出候以後者在邑ニ准候事」(80)とあるのみだが、「留」になると「一 参勤之御礼不申上前并御暇被 仰出候後者在邑ニ准候事」(81)とし在邑の開始と終了について定めている。あくまでも参勤の御礼を行ったかという点と御暇の仰付を受けたかという点が在邑であるかどうかの境界であることを示したものといえる。このほか儀礼に関する条項などについては今後の課題としたい。

## 五 文化期以降の申合帳

「留」の後に続く申合帳である「寛政元覚」では、条文自体の変更というより、急助詰に関する条文が詰日・助詰条項の次に組み込まれるなど、順番が整理し直されたような構成となり、本節でこれから扱う申合帳の順番に近いものがある。前節までのまとめの意味も含めると表3のようにとらえられる。

文化期以降の申合帳に共通している特徴のひとつに、部門別による配列が表れてくる点があげられる。そのひとつは「同席申合覚」(82)と表題がついたもので、成立に関しては不明ながら、その引用している事例を見ると、

表3 寛政期以前の申合帳一覧

史料名	成立	詰日に関する特徴的な記述	摘要
「雁之間被仰付覚付 附商売往来」	延享～宝暦期頃	享保3年 三人詰 元文2年 兩人詰(御人少)	前書に詰日起源
「申合〔元禄～宝暦期〕」	宝暦期頃	扨人詰許容	
「古 同席申合帳」	宝暦～明和期頃	差替：私的理由 助詰：公的理由、不快	部門別表記（後年によるものか）
「申合書付」	明和期頃	部屋住と家督の区別	
「明和九年壬辰九月十五日 従秋 元摂津守到来申合之覚」	明和9年	部屋住と家督の区別	
「天明八申六月 雁之間詰申合控」	天明8年		
「雁之間被仰合留」	天明8年11月、 追記分は寛政元年	急助詰新設	急助詰設置による改訂
「寛政元酉年 雁之間詰申合覚 八月」	寛政元年		後の申合帳の順番に近い

「雁之間被仰付覚付 附商売往来」「雁之間被仰合留」（東北大学狩野文庫蔵 紀伊国屋マイクロフィルム版）、  
「申合〔元禄～宝暦期〕」（「水野家文書」 首都大学東京付属図書館蔵）、  
「古 同席申合帳」「申合書付」「天明八申六月 雁之間詰申合控」「寛政元酉年 雁之間詰申合覚 八月」（「牧野  
家幕府役職詰席等関係資料」 江戸東京博物館蔵）  
「明和九年壬辰九月十五日 従秋元摂津守到来申合之覚」（「常陸国土浦土屋家文書」 国文学研究資料館蔵）  
により作成

もつとも新しいもので文化二年の事例をあげていることから、文化期頃には成立したと仮定したい。

筆者はこれを含め、この部門別のスタイルをもつ申合類を九点確認した。一覧にしたものが次の表4である。九点に共通しているのが、その分類項目と順番で、①「紅葉山」②「両山」③「遠 御成」④「詰日・助・急助」⑤「通達事」⑥「伺御機嫌」⑦「不快之節取斗」⑧「心得」の八項目の並びで構成されている。表中のいずれもが正確な成立時期は不明であるが、これまで見たようにその条文を示すにあたって根拠にあげている事例に記されている日付から、そのもつとも新しいものを拾うことで便宜的に推定することは可能と思われるので、表中に示している。

次に条文数に注目すると、文化期の申合帳と天保期のそれとでやや時期が開いていることから判断しにくい点もあるが、天保期以降のものを境に明らかに増えていることがわかる。ただしすべての部門が一律に増加している様子はなく、この九点を通じて増減の幅が極めて小さい部門も存在している。それらは③「遠 御成」⑤「通達事」⑦「不快之節取

表4 文化期以降申合帳における部門別条文数一覧

	表題	成立	①紅葉山	②阿山	③遠御成	④詰日・助・急助	⑤通達事	⑥伺御機嫌	⑦不快之節取斗	⑧心得	条文数	備考
申合帳A	寛政元年 雁之間 詰申合覚 三月	寛政元年 (1789)	7	8	2	16	8	5	0	13	59	
申合帳I	同席申合	文化2年 (1805) 以降	11	7	7	17	10	5	4	14	75	
申合帳II	[紅葉山寛永寺増上寺御参詣、遠御成、詰日、通達当勤務書上]	文化3年 (1806) 以降	10	7	7	17	10	5	4	14	74	「出仕事」部門あり
申合帳III	[申合]	文化8年 (1811) 以降	11	7	11	17	9	5	5	15	80	
申合帳IV	[諸向勤方定]	文化8年 (1811) 以降	13	7	10	17	10	5	5	15	82	
申合帳V	雁之間同席申合帳	天保9年 (1838) 以降	29	16	10	27	12	13	5	51	163	別段「詰日割方」14条分あり
申合帳VI	雁之間同席申合帳	天保9年 (1838) 以降	28	16	11	27	12	13	5	48	160	別段「詰日割方」14条分あり
申合帳VII	申合	弘化3年 (1846) 以降	31	18	10	28	12	16	5	(71)	(191)	
申合帳VIII	雁席申合帳	嘉永元年 (1848) 以降	33	18	11	30	12	17	5	(86)	(212)	別段「詰日割覚」16条分あり
申合帳IX	雁席申合帳	万延元年 (1860) 以降	33	18	11	26	12	17	5	56	178	

( ) 内は枝番も含めた数

【牧野家幕府役職詰席等関係資料】江戸東京博物館蔵(申合帳A、II、V、VI、VIII、IX)、『水野家文書』首都大学東京図書館蔵(申合帳I、III、IV、VII)により作成。

斗」の三部門である。これらはすでに文化期以降では新たな事態に直面するにあたって、従前の方法での対応が可能であったことを示すものといえる。逆に条文が増加している部門としては⑧「心得」が約三倍(ただし、途中で著しい増加と減少が見られる)、②「阿山」が約二・五倍、④「詰日・助・急助」が約一・五倍と続く。また「寛政元覚」において、巻末に収録されていた「詰日割助順覚」を同じく巻末に収めている申合帳が三点ほどあった。

また表中の申合帳VIには目録が付されており、その見出し部分を一覧にしたものが表5である。この九点の比較については別稿の機会を設けることとし、申合帳VIを例にして論を

表5 史料VI「雁之間同席申合帳」見出し一覧

部門	番号	表題	事例引用年
紅葉山	1	紅葉山大紋行列二而 御参詣之節御門番・防・火之番心得之事	天明8年
	2	正月廿四日増上寺 御成 大納言様紅葉山 御参詣之節紅葉山行列相勤候面々退出之節 公方様 還御ニ差掛り候ハヽ、坂下御番所ニ而見合候事	文化7年
	3	紅葉山行列之節、防・火之番・御門番之内ハ茂御目見ニ罷出候間、詰日ハ御目見ニ不及罷出、其外御目見ニ付、助立等心得之事	文化8年
	4	同所 御参詣之節、豫参割合之内ハ兩人致登 城居、御目見之者俄不快等ニ而出仕不致節ハ直ニ為助 御目見相勤候事	天保4年
	5	同所 御参詣 御延引被 仰出候節之事	寛政3年
	6	同所 御参詣之節、行列豫参之方江罷出候者、御目見ニ罷出候内、当朝差掛不快之時取斗方并御延引之節心得方之事	天明5年
	7	豫参難相勤、御用番江届書差出候節心得方之事	
	8	紅葉山・両山 御参詣之節向後ハ弥行列之儀并御供揃刻限於 殿中達之事	
	9	御三方様 御同参之節茂同様且御延引被 仰出候ハヽ、行列割替不申候之事	天保6年
	10	紅葉山・両山 御参詣之節、御門番之面々其外共御目見豫参断有無心得方之事	文政3年
	11	右同断豫参断届心得之事	寛政12年
	12	同所 御参詣之節行列相勤候段大目付江申達候後差掛、御目見之方江罷出候節之事	
	13	同所 御参詣之節行列・豫参 御目見共ニ当朝ニ至り断多、差掛行列・豫参ハ 御目見之方江出候節心得之事	寛政1年
	14	同所 御参詣之節御人少之時罷出候者老人ニ相成候節之事	寛政2年
	15	同所并両山 御参詣之節 御目見行列・豫参割合之儀同席落合候節、詰日之者ハ当勤江直廻伏差出方之事	
	16	同所豫参之節不快ニ而御用番登 城過ニ相成、又ハ途中迄罷出不快之節取斗之事	
	17	同所 御参詣後拝礼心得之事	
	18	同所 御参詣及殊更御延引被 仰出候節、坂下御門江出候同心を以御目付ハ通達有之候事	享和2年
	19	御規式 御成之節雨天等ニ而御延引之時詰日之者老人之節取斗方之事	文化3年
	20	紅葉山・両山 御参詣被 仰出前日、又ハ当朝御延引ニ而茂 御目見之者詰日相勤并前日助立ニ而茂助先之者直ニ詰日相勤候事	文化8年
	21	右同断之節 御目見之方老人ニ相成、御延引被 仰出候節御番所詰豫参・行列ハ老人詰日江可罷出候事	
	22	紅葉山之節服職等ニ而罷出候節之事	
	23	紅葉山豫参相勤候節、坂下御門大番所江相揃、紅葉山江罷出候程合之儀、御小人目付案内有之筈之事	文政3年
	24	紅葉山 御宮江 右大將様斗 御参詣之節豫参相勤不申事	文政2年
	25	紅葉山 御宮江大紋行列二而 内府様斗 御参詣之節御門番・防・火之番手明之者并詰日之者心得方之事	文政9年
	26	大納言様同所 御参詣之節勤方之事	文政13年
	27	(紅葉山 御宮江 御同参之節…) ※目録上記載なし。筆者による追加。	天保4年
	28	(紅葉山 御宮惣 御霊屋江 公方様 御参詣 還御後…) ※目録上記載なし。筆者による追加。	文政13年

両山	1	両山 御参詣之節行列・豫参共御門番之当番、大手・内櫻田・西九大手・外櫻田御門番勤方并 御目見之方不快等之節心得方之事	天明7年、 文政11年
	2	両山 御参詣御延引之節、通達心得之事	文政3年
	3	両山 御参詣之節豫参・行列難相勤時屈方之事	
	4	御門番之面々御番所江相詰候分、豫参断不及候事	文政3年
	5	両山 御参詣之節御門番・火之番、御目見・豫参断屈方之事	寛政12年
	6	両山 御参詣之節行列相勤候段大目付江申達候後、差掛 御目見之方江罷出候節之事	
	7	両山 御参詣之節御役場持多、御人少二而 御目見之方咄人二相成候節之事	寛政2年
	8	同断御人少二而三人二相成、行列・豫参之方咄人二之節、若其者病氣之節之事	文政11年
	9	両山 御参詣之節行列・豫参割合差出方心得之事	文政5年
	10	内府様両山 御参詣之節嫡子之衆豫参不相勤候事	享保12年、 文政12年
	11	内府様同断 御参詣之節雁之間四品二而豫参相勤候事	文政12年
	12	両山 御参詣後拝礼心得之事	寛政3年
	13	安国殿 御参詣之節詰日之者心得之事	文化11年
	14	内府様両山 御参詣之節豫参相勤候事	文政12年
	15	内府様両山 御参詣之節門前 通御、或者不快等二而詰日罷出候者無之節之事	文政12年
	16	内府様両山 御参詣之節豫参断多二而咄人茂無之砌、屈取斗之儀心得之事	天保2年
遠 御成	1	遠 御成之節詰日并廻勤等心得之事	文化2年
	2	防之者急助心得日 御成有之節之事	
	3	西丸様 御成之節火之番・防同断心得之事	安永6年
	4	御礼無之期望、廿八日遠 御成之節之事	寛政10年
	5	同断吹上江 御成、田安殿江 御立寄之節心得之事	文化3年
	6	御礼無之廿八日 御成御延引被 仰出承候節之事	文化3年
	7	遠 御成之節門前御場所二相成、或ハ門前屋敷脇 通御之節、詰日二当候者心得之事	文政8年
	8	一橋外明地 御成并箱崎田安殿江 御立寄之節之事	
	9	昼九時より御供揃二而 御成之節防之者廻勤心得之事	寛政5年
	10	西丸様遠 御成之節、詰日之者御門番二而助立心得之事	文化8年
	11	右同断詰日二当、助立時刻之事	文化8年
	1	三人詰以上居殘心得之事	
	2	兩人詰之節咄人差掛り不快之節之事	
	3	火之番・御門番之者詰日之節御曲輪内出火心得之事	天明8年
	4	防・火之番御番所相詰候者急助持之日出火有之致出馬候節之事	
	5	火之番御門番之面々出仕日之当晚出火二而持場江相詰候而茂登 城刻限半 時前引取候ハ、可致出仕候事	天保4年
	6	助詰申来候時不快二而難相勤、流し候節之事	
	7	兩人詰致差替候節之事	
	8	詰日之者従前日不快之節差替申遣候節心得之事	
	9	右同断兩人詰二而今咄人之者は又差支候節急助之者心得之事	
	10	助立二相成、助先之者不快二而流し候節之事	
	11	急助日心得之事	
	12	急助日心得日御用 召之節心得之事	

同席大名間における「申合帳」の変遷過程 — 詰衆を例として —

詰日・助・急助	13	右同断之日紅葉山・両山 御参詣之節之事	
	14	急助心得之節一統出仕日不快之節之事	
	15	急助心得日年寄衆登 城前ハ格別、其外勤心得之事	
	16	急助相勤候節返詰心得之事	
	17	急助心得之者江差替頼申間鋪事	
	18	助詰相勤候節之事	
	19	名代事被相頼、助詰之儀申来候節心得之事	文化 13 年
	20	助詰之儀申来候節難去用向有之時心得方之事	
	21	病氣・差合等ニ而三人ニ相成候節之事	文政元年、 文政 6 年
	22	同断ニ而詰日相勤候者無之節之事	文政 9 年
	23	当勤四人ニ而詰日三番致出仕候節之事	文政 9 年
	24	忝人詰相成居、追而兩人詰致し候節之事	文政 12 年
	25	口 宣頂戴之日詰日ニ当り候節心得之事	文政 10 年、 天保 9 年
	26	家督後詰日可相勤廻状差出、未詰日不相勤候以前一統出仕有之助心得之事	文政 10 年
	27	詰日其外割合書付持出候節之事	天保 4 年
通達事	1	大目付衆御書付被相渡、又者口達事、御用向其外御番所・火之番・防等被仰付候節、病氣・差合之時取斗方之事	寛政 12 年
	2	格別重キ儀者病氣・幼少江茂直廻状之事	
	3	年寄衆直達有之節之事	文政 12 年
	4	都而同席江通達之節、嫡子之衆江茂通達之事	
	5	大目付衆ハ年寄衆月番誰殿被相心得、病氣・差合等ニ而登 城無之節、下手紙・下廻状差出方之事	
	6	御目付ハ達事下廻状・下手紙差出方之事	
	7	参勤御礼不申上候以前、御暇被 仰出候後心得之事	
	8	御曲輪内出火并初雪之節伺御機嫌心得之事	
	9	土用入・寒入御法事其外伺御機嫌心得并直廻状・下手紙差出方之事	
	10	芸術 上覧有之大目付ハ詰日之者江被申間候節之事	享和 2 年
	11	着服分リ兼候節、前日大目付江問合通達之事	文政 3 年
	12	年寄衆早メ登 城之節前日廻状差出方之事	文政 4 年
伺御機嫌	1	御曲輪内出火之節伺御機嫌登 城之上取斗之事	
	2	御曲輪近辺出火有之出仕時刻過、消火無之節之事	文政 7 年
	3	御曲輪内出火之節翌日為何御機嫌出仕之事	文政 11 年
	4	御曲輪近辺出火ニ而老衆登 城有之節之事	
	5	御三家・御三卿方屋鋪焼失之節之事	
	6	御守殿并御仕居有之、屋鋪焼失登 城有之節之事	
	7	両山内出火登 城有之節之事	文政 12 年
	8	土用入・寒入御法事中、其外伺御機嫌高家衆・御奏者番衆・当衆申合候節之事	
	9	初雪伺御機嫌ハ有無難相知候間、登 城之上取斗方之事	
	10	都而西九江伺御機嫌出仕之儀心得之事	
	11	同席申合ニ而伺御機嫌登 城致候節不快等ニ而出仕不致候節之事	
	12	御法事伺御機嫌之節、年寄衆御挨拶有之節申上方之事	文政 3 年
	13	御中陰中右同断、御挨拶有之節之事	文政 10 年

不快取斗	1	參勤後病氣又者快（ママ）致出勤当分詰日・助共断有之節之事	
	2	不快之節詰日五度迄ハ頼合可申、尤病氣之模様ニ寄心得之事	
	3	病氣ニ而引込候節三十日済候ハ、御用番江届方之事	
	4	一統出仕日不快ニ而届入候時、御用番登 城過与存候而茂届差出候事	
	5	不快ニ而詰日断候節、嫡子之衆江案内之事	文化 14 年
心得	1	年始御流時服初而頂戴之者廻勤等之事	天保 4 年
	2	御謠初・玄猪初而之者翌朝御用番江斗為御礼相越候事	天保 4 年
	3	御具足・嘉定 御誕生日御祝儀初而出仕之者御礼之事	天保 4 年
	4	八朔初而之者心得之事	天保 4 年
	5	御座席奉行名前出候者不致登 城候節御用番江断申達ニ不及候事	文化 7 年
	6	右同断前日詰日之者より通達心得之事	文化 13 年
	7	正月十四日着服心得之事	天明 7 年
	8	初講釈心得之事	
	9	都而名代事被相頼候者心得之事	
	10	御用ニ而被為 召候節寄場心得之事	安永 4 年
	11	雁之間細廊下年寄衆被通候節心得之事	
	12	平日詰日其外一統出仕共年寄衆被出候前登 城候様申合之事	文化 3 年
	13	芙蓉之間、竹之間御用有之候節心得之事	天明 7 年
	14	二月朔日公家衆 御対顔 御返答上野増上寺出、家中御礼等之節御目見致し候心得之事	
	15	竹之間ニ而御饗応有之候節心得之事	
	16	竹之間御座席奉行相動候節、御饗応中御挨拶筆頭ニ而申上候事	文化 8 年
	17	同断之節御三家方御退散御送之事	文化 8 年
	18	御能之節御座席奉行初而相動候節心得之事	文政 12 年
	19	御能見物之節御座席奉行江御礼心得之事	天 保 3 年、 天保 4 年
	20	月次御礼後蘭人 御覧之節心得之事	
	21	不時御礼之節蘭人 御覧之節心得之事	
	22	右同断之節、山吹之間一同御礼有之節心得之事	文政 9 年
	23	御法事済ニ付日光准后、同新宮 御対顔之節心得之事	文政 12 年
	24	大納言様 御本丸江被為 入候御定日之事	文化 4 年
	25	例月 右大將様 御入之節夏御道具風入有之節之事	文政 4 年
	26	大納言様 御本丸江御定日被為 入候節詰合之時刻斗御目見罷出候心得之事	文化 4 年
	27	大納言様御駕籠臺又ハ西御縁より 御本丸江被為 入候節 御目見之儀心得之事	文化 4 年
	28	諸御礼首尾好申上候御礼於雁之間年寄衆江申上候節座順之事	文政 3 年
	29	定式出仕日并西丸出仕日心得之事	
	30	都而出仕之儀ニ付御書付出候ハ、口達有之分出仕不致候節取斗之事	
	31	玄猪御祝儀頂戴之節心得之事	
	32	御礼有之朔望・廿八日初而登 城之者、西丸江茂登（ママ）	享 和 2 年、 天保 8 年
	33	初而若葉御祝儀申上候節并上巳・端午・重陽初而之節御礼調直動等之事	文政 11 年、 天保 4 年
	34	嘉定御祝儀頂戴席并心得方之事	文化 12 年
	35	大坂加番御暇并掃府御礼申上候節対客御礼之事	天保 4 年
	36	參勤・御暇其外都而席御礼有之節御用番対客江罷出不及候事	文化 11 年
	37	參勤御礼願書進達之節伺御機嫌心得之事	文化 11 年
	38	外御礼願書進達之節伺御機嫌ニ不及候事	文化 11 年



39	紅葉山・両山 御成之節被 仰出無之時ハ廻状不差出申合之事	文化14年
40	七月十四日紅葉山豫参之節自拝相済候ハ、辺中両山参詣ニ不及候事	天保4年
41	大納言様表 出御無之節、通達有無心得之事	文化10年
42	三大手其外所々御門番当番式日 御成有之御番所江相詰候二付、御用番江御届申達不致出仕候節、詰日ニ当候而茂助立ニ不及心得之事	
43	御礼無之期望、廿八日 西丸様遠 御成御延引被 仰出候節、御門番其外出仕心得之事	天保4年
44	式日其外都而一同出仕之内、詰日当候砌、御用 召当之節	文政3年
45	御内書御渡之日詰日之者麻上下之俣登 城、中之口ニ而着替候事	文政12年
46	右同断一統出仕日之節之事	天保6年
47	在府中御札有之候期望、廿八日登 城之節之事	天保6年
48	供立之儀作法宜様と前々度々被 仰出義有之ニ付、猶又嚴重可申付旨申合之事	文政12年

「雁之間同席申合帳」(『牧野家幕府役職詰席等関係資料』 江戸東京博物館蔵) により作成

表6 史料Ⅵ「雁之間同席申合帳」における引用事例時期

	①紅葉山	②両山	③遠 御成	④詰日・助・急助	⑤通達事	⑥伺御機嫌	⑦不快之節取斗	⑧心得	計
文化8年以前	11	6	8	1	2	0	0	11	39
文化9～14年	0	1	0	1	0	0	0	7	9
文政年間	6	6	1	6	3	5	1	9	37
天保年間に降	3	1	0	2	0	0	0	10	16
不明	8	2	2	17	7	8	4	11	59
計	28	16	11	27	12	13	5	48	160

「雁之間同席申合帳」(『牧野家幕府役職詰席等関係資料』 江戸東京博物館蔵) により作成

進めていきたい。まずはこの頃に条文が増えている①「紅葉山」②「両山」④「詰日・助・急助」⑥「伺御機嫌」⑧「心得」について順番に見ていきたい。

表中には条文を記載するにあたって根拠としている事例の年を併記した。これをもとにどの期間の事例を根拠としているかを数値で示したものが表6である。不明としているのは事例の引用がなためである(おそらくは、従来より規定されていた事項、つまりは敢えて年次を示さずとも共有できる事項、もしくは年次を明らかにすることが困難な事例としてとらえられていたとの判断が可能と思われる)。ここから見えてくるのは文政期の事例を根拠としている条文が二割以上を占めている点である。天保期の事例も合わせると約三割が新たに追加されていることがわかる。これ以降は「心得」を除き、微増となることから、この時期に詰衆の申合類の条文が増えていき、幕末に

至ったものと捉えられよう。

## おわりに

最後に文久・慶応期の詰衆の日記に残された記録を紹介したい。

一 雁之間席之儀ハ他席与ハ訳違、一際取締不申候与不相成義ニ付、万時質素第一ニ心懸候之様致し度与申合

### 候事（83）

これは、文久期において詰衆間で廻達された覚書からの一文である。「近来取締向相弛候趣」のために話し合いがもたれ、「申合帳心得之部末江銘々様御留被置候様」にと通達されたものである。冒頭にある「雁之間席之儀ハ他席与ハ訳違」と述べられている点は注目してよいものであらう。これより後にも老中に対する参勤交代にかかわる願書にも「当御時勢柄江戸表手薄ニ相成候様ニ而者甚心配仕候、当席之儀者外席共違、御場所柄も相勤候事故席柄之廉を以（中略）御奉公仕度」（84）とし、他席の大名とは異なる存在であることを内部にも外部にも示すことで自らの存在を誇示していったと考えられる。それには昇進ルートの出発点としての矜持ともいえるものでもあるう。

本稿では、詰衆内で共有されていた申合帳を編年的に見ていくことで、その勤めを全うするため、時代に合わせで改編していた様子が明らかにできたと考える。おおよそ本稿で取り上げた申合帳をまとめると前掲表3及び4のとおりである。改めて触れるとするならば、平日も交代で勤務するという独自の姿をはじめ、長期にわたってその活動を途絶えることなく続けていった背景には、合議のもとで定められた決まり事があったからこそそのものといえ

よう。度々述べているが、文政期以降に申合の条文が顕著に増加していく点について今後の課題とし、別稿にて明らかにしていきたい。

註

- (1) 松尾美恵子「雁之間詰大名の江戸勤め」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第二二号)二〇〇六年
- (2) 拙著「詰衆に関する基礎的考察」(『国士館史学』第一一号)二〇〇五年、「宝暦期詰衆の「詰日」と「外勤」」(『国士館史学』第一七号)二〇一三年、「江戸城輪番勤務者の登城日数に関する数量的考察」(『国士館史学』第二二号)二〇一七年
- (3) 「申合帳」の名称については「雁席申合帳」「覚」など、内容的に同一のものであっても区々であり、本稿では主として詰衆の日記中で使われることの多い「申合帳」を用いることとする。
- (4) 「日記」(『牧野家幕府役職詰席等関係資料』江戸東京博物館蔵)
- (5) 詰日之衆とは詰日の勤めにあたる者のことで、詰日之者と称されることもある。
- (6) 前掲註(4)
- (7) 前掲註(2)
- (8) 前掲註(1)
- (9) 「雁之間日記 乾」(『牧野家幕府役職詰席等関係資料』江戸東京博物館蔵)
- (10) 「雁之間日記 坤」(『牧野家幕府役職詰席等関係資料』江戸東京博物館蔵)
- (11) 前掲註(9)(10)
- (12) 東北大学狩野文庫蔵、紀伊国屋書店マイクロフィルム版
- (13) 「雁之間被仰合覚付 附商売往来」、前掲註(12)
- (14) 『江戸幕府役職武鑑編年集成』東洋書林
- (15) 前掲註(12)(13)
- (16) 『水野家文書』首都大学東京図書館蔵

(17) 前掲註 (1) 「申合」〔元禄〕宝曆期〕、前掲註 (13)

(18) 前掲註 (1)

(19) 前掲註 (1) 「勤向覚日記」〔常陸国土浦土屋家文書〕 国文学研究資料館蔵

(20) 前掲註 (16)

(21) 前掲註 (1) 「古 同席申合帳」〔牧野家幕府役職詰席等関係資料〕 江戸東京博物館蔵

(22) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(23) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(24) 前掲註 (1) 及び『常陸国土浦土屋家文書』(国文学研究資料館蔵) 内の詰衆時代の日記による。

(25) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(26) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(27) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(28) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(29) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(30) 前掲註 (13) 「雁之間被仰合覺付 附商売往来」

(31) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(32) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(33) 前掲註 (13) 「雁之間被仰合覺付 附商売往来」

(34) 前掲註 (13) 「雁之間被仰合覺付 附商売往来」

(35) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(36) 前掲註 (13) 「雁之間被仰合覺付 附商売往来」

(37) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(38) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

(39) 前掲註 (21) 「古 同席申合帳」

- (40) 前掲註(13)「雁之間被仰合覺付 附商売往来」
- (41) 前掲註(21)「古 同席申合帳」
- (42) 前掲註(13)「雁之間被仰合覺付 附商売往来」
- (43) 「明和九壬辰年九月十五日從秋元撰津守到来申合之覺」(「常陸国土浦土屋家文書」) 国文学研究資料館蔵
- (44) 「(牧野家幕府役職詰席等關係資料)」江戸東京博物館蔵
- (45) 前掲註(43)
- (46) 「(牧野家幕府役職詰席等關係資料)」江戸東京博物館蔵
- (47) 東北大学狩野文庫蔵 紀伊國屋書店マイクロフィルム版
- (48) 「(牧野家幕府役職詰席等關係資料)」江戸東京博物館蔵
- (49) 前掲註(44)「申合書付」
- (50) 前掲註(44)「申合書付」
- (51) 前掲註(44)「申合書付」
- (52) 前掲註(47)「雁之間被仰合留」
- (53) 前掲註(44)「申合書付」
- (54) 前掲註(47)「雁之間被仰合留」
- (55) 前掲註(44)「申合書付」
- (56) 前掲註(44)「申合書付」
- (57) 前掲註(47)「雁之間被仰合留」
- (58) 前掲註(44)「申合書付」
- (59) 前掲註(47)「雁之間被仰合留」
- (60) 前掲註(44)「申合書付」
- (61) 前掲註(47)「雁之間被仰合留」
- (62) 前掲註(44)「申合書付」

- (63) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (64) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (65) 前掲註 (44) 「申合書付」
- (66) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (67) 前掲註 (44) 「申合書付」
- (68) 前掲註 (44) 「申合書付」
- (69) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (70) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (71) 前掲註 (44) 「申合書付」
- (72) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (73) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (74) 前掲註 (44) 「申合書付」
- (75) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (76) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (77) 前掲註 (44) 「申合書付」
- (78) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (79) 前掲註 (44) 「申合書付」
- (80) 前掲註 (47) 「雁之間被仰合留」
- (81) 前掲註 (44) 「申合書付」
- (82) 「申合」〔『水野家文書』首都大学東京図書館蔵〕
- (83) 「日記 文久元年五月二十七日より」〔『牧野家幕府役職詰席等関係資料』江戸東京博物館蔵〕
- (84) 「日記 慶応元年五月二十五日より」〔『牧野家幕府役職詰席等関係資料』江戸東京博物館蔵〕